琉球大学学術リポジトリ

# 「教職の意義等に関する科目」の実践的研究：教職像・教職志望を中心に



| メタデータ | 言語: |
| --- | --- |
| | 出版者: 琉球大学教育学部 |
| | 公開日: 2007-07-19 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 藤原, 幸男, Fujiwara, Yukio |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/1071 |

# 「教職の意義等に関する科目」の実践的研究
## ― 教職像・教職志望を中心に ―

藤 原 幸 男*

**Theoretical Consideration and Trial of "Studies on Teaching Profession"**
**—on Image and Desire of Teaching Profession—**

Yukio FUJIWARA

## はじめに

教育職員免許法の改正により、1998年度あるいは1999年度から各大学で「教職の意義等に関する科目」が「教師論」「教職研究」「教職入門」などの授業科目名で実践されはじめた。この科目については、はじめは戸惑いがあったが、しだいに教科書が出され、授業実践報告も学会・協会紀要などに掲載されるようになった。(1) 2001年10月8日には、東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センターの主催で、第1回教師教育実践ワークショップが開催され、「教職の意義等に関する科目」の実践交流がおこなわれた。(2)

本報告では、これらの実践報告や実践交流に触発されて考えたことを取り入れながら、琉球大学で藤原の担当した「教職の意義等に関する科目」の授業構想と実践の報告をする。

## 1．教育職員免許法改正と「教職の意義等に関する科目」

教育職員養成審議会第1次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」（1997年7月28日）は、教員養成カリキュラムの改善について提起した。「養成段階で特に教授・指導すべき内容の範囲」として、「教職への志向と一体感の形成」、「教職に必要な知識及び技能の形成」、「教科等に関する専門的知識及び技能の形成」の3つをあげた。

このうち、「教職への志向と一体感の形成」はとくにその重要性が強調された。「教職への志向と一体感の形成」で言われている内容は、「教職の意義、教員の役割、職務内容等に関する理解を深めさせることを通じ、教員を志願する者に教職に対する自らの適性を考察させるとともに、教職への意欲や一体感の形成を促す観点から、指導・助言・援助を行う」ことである。それは、「教職課程における履修計画・内容等についての指導」、「教職についての理解を深めるための指導」、「選択・決定の指導」の3つの内容を含むとされている。

教育職員養成審議会第1次答申は、「教職への志向と一体感の形成」に属する内容は原則として養成段階で確実に修得すべきで、教職課程全体の履修を通じて繰り返し行われるべきとしながらも、「教職への志向と一体感の形成に関する科目」（仮称、2単位）を新設し、この科目で取り立てて指導することを提起した。

そして、1年次配当、教育の本質・目標等に係わる科目の授業との内容調整と有機的関連、教職経験が豊富な現職教員の活用、学校での実際の授業の活用、それに代わるビデオ等の積極的活用を説いている。

「教職への志向と一体感の形成に関する科目」については、「一体感」についての疑義がだされ、「これがそのまま省令等に表現されると、極めて

*教育学教室

わかりにくいということになりまして、担当する方も困るのではないのではないでしょうか」という中野光日本教師教育学会会長の国会（衆議院文教委員会）参考人発言も影響してか[3]、教育職員免許法施行規則（1998年６月25日）では、「教職の意義等に関する科目」に名称を変更し、その内容として、「教職の意義及び教員の役割」、「教員の職務内容（研修、服務及び身分保障等を含む）」、「進路選択に資する各種の機会の提供等」の３つを「この科目に含めることが必要な事項」として指定した。こうして「教職の意義等に関する科目」が誕生したのである。

この科目については、これまでも教育原理などで取り扱われてきた経緯はあるものの、教職・教師にかかわる内容を体系的に伝えることにおいて弱かったこと、新設科目では「教職への志向と一体感」の強調が後退し教職の内容（教職の意義・教員の役割・職務内容）の理解を中心にすえていることを考えると、一定の意義はある。

しかし、次の４点において検討の余地があるといえる。

第１に、学年配当の問題である。教育職員養成審議会答申では１年次配当の科目とされているが、１年次では、教職の意義、教員の役割・職務内容は知識として教授できても、大学生になったばかりの１年生には実感できにくい。１年次配当とすれば、体験的活動を軸にして教職内容の理解を進めるしかない。教員の身分と服務・研修などの法規的部分は重要だが、教員養成の１年次段階では基本的なものにとどめ、あとは２年次以降の教育法規関係の授業科目や採用後の研修で学ぶのがふさわしいだろう。２年次以降だと、教職のほかの授業科目や教育実習との関係で広がりと深まりが期待できる。

第２に、教育の本質・目標論との有機的関連を述べているが、そのことを強調しすぎると、特定の教師像に当てはめることになり、理想主義的な教師論・教職論に陥る危険性がある。むしろ教育実践論との結合が重要ではないか。一人のあるいは複数の教師の継続的な教育実践を追跡・追体験することを通して、教職の意義・教員の役割・職務内容がリアルに実感できるのではないか。

第３に、「教職への志向と一体感の形成」が消失していることの問題である。たしかに「志向と一体感」という言語表現には聖職的意味あいが感じられ、専門職的視点からの検討が必要である。また、「教職への志向と一体感の形成」を何の媒介もなしに理想論的に訴えるのには方法的に重大な問題がある。２であげた教育の本質・目標論との有機的関連を強調する方向づけは、この傾向を強める可能性がある。しかし、教師の具体的な教育活動をとおして何らかの「教職への志向と一体感の形成」をもつことは重要である。施行規則において、教師の具体的な教育活動をとおしての「教職への志向と一体感の形成」という構造的把握の視野が消失してしまっていることに、問題がある。

第４に、「教職の意義及び教員の役割」、「教員の服務内容（研修、服務及び身分保障等を含む）に並行して、「進路選択に資する各種の機会の提供」があがっているが、原則的に言えば、教職の意義・教員の役割・職務内容を学ぶことをとおしての「進路選択に資する各種の機会の提供」であるべきだということである。とかくすると、それらの内容と切れたところで、学校現場体験・現職教員の体験談をもちこみ、それでもって進路選択の機会の提供とする傾向も見られるが、そうではなく、上記内容の学習のなかに学校現場体験・現職教員の体験談が位置づけられ、上記内容と結びつけて計画され、進路選択に資するように方向づけられる必要がある。

高野和子がいうように、この視点からは、「教職の意義及び教員の役割」、「教員の服務内容（研修、服務及び身分保障等を含む）」の客観的・実証的学習をとおして「履修者が教師という職業イメージを具体化することができ、それをひとつの比較モデルとして進路を選びとっていく」ことが授業の目標になり、「最終の重点は「進路選択」におく」のがこの科目の核心だといえる。[4]

## ２．「教職研究」の授業計画と実施

琉球大学では、「教職の意義等に関する科目」を「教職研究」という授業科目で開設してきている。受講年次は１年次、授業内容は「教職の意義、教員の役割、職務内容、活動についての概説」と

した。教育学教室および教育実践総合センターの専任教官が担当してきている。クラスは約60名規模で毎学期４クラスを開設している。

藤原が担当した平成13年度前期「教職研究」は、登録者は56名（教育学部51名、医学部＜保健学科＞２名、科目等履修生３名）である。以下では、この授業について報告する。

(1) 授業計画の作成にあたって考えたこと

① １年次配当なので、教師の教育活動をとおして教職の意義・役割・職務内容を考えさせることを中心にすえる。そのさい、現職の教員による指導ではなく、「複数の教師の継続的な教育活動の追跡をとおして、教職の意義、教員の役割・職務内容が見えてくる」内容をもったビデオを見せ、ねらいにせまることを考えた。

② 登録年次１年次で他学部学生（２年次登録）も受講だが、受講学生は、必ずしも教職志望とは限らない。教職を志望したとしても、その程度はさまざまである。しかし、どの学生にも教師との出会い・被教育体験がある。それを引き出し、それと結びつけるような働きかけ・しかけが必要である。事前調査で授業内容についての要望を取り入れるとともに、講義の展開の中でしだいに教職に眼を向けさせるような流れと展開を考えた。

③ 教職の光と影の両側面をありのままに伝えるということ。教師教育の研究者でもある山崎準二は、いじめ・荒れ・崩壊などの「現実の矢面に立ち、多くの教師たち・教職志望者たちは、言い知れぬ虚脱感にさいなまれ、教職へと向かう足取りさえが重くなっていることを感じている。そして教師養成という営みに携わる者として、教職の魅力を語ることに苦しさを、教職へといざなうことに躊躇を、密かに感じてしまうのも私だけではないだろう」[5] と語っている。同感である。展望を熱く語ることに躊躇することがしばしばである。教師・教職を語ることの困難さは、教職担当者の共通の悩みなのであろう。

ここで発想の転換が必要なのだろう。ジャーナリストの故・斎藤茂男が光と影について語っていたが、影の中に光があり、光の中に影がある。現代社会の中で教師・教職を研究するには、光と影を相伴うという把握がリアルだといえる。そうだとすると、教師・学校の苦闘から眼をそらさずに、「苦しさの中に一条の光があり、やりがいの中に苦しさがある」姿をありのままに伝え、それをしっかり認識した上でそれでも教師・教職を選び取ることを教職志望者に期待するほかない。

具体的には、授業の中でビデオという形でさまざまに苦闘している教師・学校に登場してもらい、教師の教育活動をとおして教師・教職の困難と魅力をつかんでもらう。その際ビデオとしては、教材用に作成されたビデオではなく、一般向けに放映されたストーリー性のあるビデオをそのまま使用する。そのほうが、真正性（ほんもの）からくる訴求力をもつ。衝撃が強い。ビデオに登場する教師たちに共感し、そこから受講生なりに教職について考えることが多いと予想される。

(2) 事前調査

「教職研究」の最初の時間に授業計画（シラバス）の概要を説明するとともに、事前調査として、「思い出に残る教師」、「要望調査（教師に関することで詳しく（または）深く知りたいこと）」を書いてもらった。すると、次のような事項が上がった。

・教師の生活
・教師と生徒の人間関係。子どもとの距離のとり方。
・楽しく学べる教え方。
・教師の適性。
・教師の悩みとストレス。
・教師の体罰。
・教師の責任のおよぶ範囲。
・教師の生きがい。教師になった動機。
・教師間の人間関係。教師と地域社会のかかわり。
・教員採用試験と実際の採用について。

ずいぶん幅広く、思ったよりはるかにいろいろなことに関心をもっていることがわかり、書いてもらってよかったと感じた。これらの記述を整理して、次のようにコメントした。

「これらのすべてを扱うことはできません。「教職研究」では、最近の学校現場の様子に触れながら、教師の仕事と教師のあり方を追究します。

それと関連して、学校における教師のストレスと教師集団のあり方にも触れます。……いじめ、不登校、体罰、学級崩壊をめぐる議論は奥が深いのですが、「教職研究」では、学級崩壊について教師のあり方とのかかわりで取り上げます。体罰は教員の服務とのかかわりで取り上げます。いじめ、不登校、体罰、学級崩壊は、「生活指導」「教育相談」「カウンセリング」などの授業科目でくわしく学問的に検討することになります。」

(3) 授業の計画と実践

当初の計画では、学級崩壊を扱うことにしていたが、取りやめ、中堅教師の苦しみと成長、教科指導(1)に振り替えた。教師の生涯発達ということを考えさせたかったのと、教科指導を重視するという2つの理由からである。この変更以外は当初の計画のままである。実際におこなった授業内容とそれにかかわって使用したビデオを書いておく。

1．オリエンテーション（「教職研究」という科目、授業計画の説明。）
2．子どもの生活と心（ビデオ「14歳・心の風景」）
3．教師誕生（ビデオ「教師誕生――新採用教員の1年――」）
4．中堅教師の苦しみと教育実践（ビデオ「日本の宿題・シリーズ学校、校長の挑戦・公開授業と授業評価」）
5．子ども理解と教育実践（ビデオ「津田っちの赤ペン」）
6．教科指導(1)――文化を伝えるということ、教えるということ――」（ビデオ「若き教師たちへ――青森県十和田市立三本木小学校・伊藤校長の最後の1年間――」）
7．教科指導(2)――教材の開発――（ビデオ「“のらねこ”の挑戦――高校物理教師たちの型破り授業――」）
8．総合的な学習と地域に根ざした学校（ビデオ「浜之郷小学校の1学期」）
9．教育評価――指導要録と内申書――（ビデオ「内申書はこうしてつくられる」）
10．教師の身分と服務
11．教師の歴史と教職の専門性
12．教職の特徴と教師のストレス
13．教職の特徴と教師のストレス(2)（ビデオ「日本の宿題・シリーズ学校⑥、教師はなぜ疲れるのか――総合的な学習――」）、教員の養成

子どもの現状をふまえ、新採用教員と中堅教員の苦闘する姿を見せ、教員の苦悩と成長を追体験させ、それを通して将来の歩む道の展望をもたせる。その後で、教師の教育実践を子ども理解と学級通信、教科指導、総合的な学習、教育評価の順に扱い、教師の苦しみと喜び・生きがいを追体験させる。それをふまえて、法的問題、教師の歴史、教職の専門性へとすすみ、その上で教職の特徴と教師のストレスを扱って、「ストレスのたまる大変な仕事ですが、それでも教職を進路選択の一つにしますか」、とせまる。――このような展開構想である。

## 3．「教職研究」と教職像

最終日に、「「教職研究」で扱った内容のうち、特に印象に残ったものを2つあげ、それぞれについて学んだこと・勉強になったことを詳しく述べなさい」、として受講学生に記述してもらった。この節では、その記述をもとに、学生がイメージした教職像（教職の困難と魅力、つまりビデオなどで教職の光と影、苦しさと魅力を伝えたが、受講学生はそれをどのように受け止めているか。）について検討したい。

(1) 特に印象に残った内容

学生の特に印象に残った内容は、次のものである。数字は回答数（複数回答）である。

| | | |
|---|---|---|
| 1位 | 教職とストレス | 30 |
| 2位 | 教師の成長 | 20 |
| 3位 | 子ども理解と教育実践 | 19 |
| 4位 | 教科指導 | 17 |
| 5位 | 子どもの生活と心 | 6 |
| 5位 | 総合的な学習 | 6 |
| 5位 | 指導要録と内申書 | 6 |

(2) 授業で扱った事項ごとの教職像

上位4位までと5位の「指導要録と内申書」について、授業で扱った順に取り上げ、教職像（教職の困難さと魅力）について検討していきたい。

① 教師の成長

第3回「教師誕生――新採用教員の1年――」・第4回「校長の挑戦・公開授業と授業評価」で新採用教員、中堅教員の苦闘と成長のすがたを取り上げた。教師としての成長の厳しさと喜び・魅力を早い段階で意識させることをねらった。

ビデオ「教師誕生――新採用教員の1年――」では、まず、教職が想像以上にハードで大変な仕事だということを認識した。ある学生は、次のように書いている。

「このビデオを見るまでは「教師になりたい、生徒とともに成長していきたい」と希望だけを持っていたが、「教師という職業はとてもいそがしい職業だと、頭ではわかっていたつもりだが、正直言ってビデオを見て「本当に教師という職業を自分はやっていけるだろうか。つらくなってやめたくならないだろうか。」と思った。このように考えてしまう自分のことがそのときはすごくいやに思った。「こんなことを考える人が、子どもたちの支えにならなければならない教師という大変な職業をめざす資格があるのか」と思ったからである。しかしいまは、このようなことを考えることが自分には必要だったし、よかったと思う。「やはり、教師になりたい」という気持ちが前より強くなった。このような機会を与えてもらったこの時間の授業に私は本当に感謝したい。」

学生は、子どもの抵抗にあったりして自分の思うようになかなかいかずくじけそうになる場面を見、時間的な忙しさを新任教員の生活をとおして知ることによって、教職の難しさを改めて実感した。しかし、新任教員が試行錯誤しながら子どもの自主性を尊重するようになり、子どもの成長に喜びをみいだす新任教員の姿に共感した。「試行錯誤しながら成長していく」姿をとおして、将来歩む教師としての見通しをもった。生徒から学ぶことによって成長することの大切さ、周りの教師の支え・助言の大切さを実感した。「情熱と愛情を持って子どもたちに接すれば先生もまた成長することができる」とまで単純化はできないにせよ、新任教師の苦闘と成長から、リアルな現実認識と憧れを含んで教師・教職像を学び取ったといえよう。

ビデオ「校長の挑戦・公開授業と授業評価」では、中堅教員の仕事＝実践の挫折と成長を見せた。公開授業と生徒による授業評価というとりくみをとおして、中堅教員が一度は自信を失いかけながら、精神的な葛藤を経験しながら、自分の授業を見直し、立ち直り成長していった姿を、多くの学生は「教師の厳しい現実」と受けとめながらも、乗り越えた教員の姿を感動の眼で見ていった。

学生は、中堅教員は子どもの扱いも授業の展開もうまくいっているとそれまで捉えていて、中堅教員がこのような葛藤に追い込まれるとは想像できなかったはずである。初任教員の先にある中堅教員の姿を苦闘とともにイメージし、長いスパンで教員のライフコースを描くことができたのではないかと思う。

公開授業や授業評価は、「いままでやってきたやりかたを否定されることもあるので、気持ちのよいものではないが、それを素直にうけとめ、よりよい教師になるよう自分の悪いところを改善していくことはすばらしい」、「何年も教師を経験してきて、それなりに自信をもっているのに、自分の授業の欠陥を校長や生徒に指摘されると、やはり落ち込んでしまう。自分のプライドを捨てて新しい授業をつくっていこうと努力していく勇気には感動した。」と書いている。

このような中堅教員の姿をとおして、学生たちは、「教員には信念を貫く「頑なさ」とともに、臨機応変に対応できる「柔軟性」を兼ね備えていなければならないということを学びました」、「現在、時代の変化も激しい中、子どもたちも変わってきている。それに対応していく柔軟さと、良い授業をやっていこうという授業に対する情熱、その大切さを強く感じました」ということを学んでいる。

② 子ども理解と教育実践

第5回「子ども理解と教育実践」では、生活つづり方教師の子ども理解と教育実践をあつかった。戸田唯巳の「帽子を脱がない子」を紹介した。子どものつらさ・痛みに共感し、それを何とかしようとかばう教師の配慮に、多くの学生は教師性を実感した。これについてある学生は、この話の中

から私が学んだのは、「生徒の気持ちをいちはやく察する気配りと、生徒の気持ちに共感し、どのようにしたら生徒が生き生きと生活することができるのかという生徒への愛情です。もうひとつ、生徒を観察する力が教師になる上で大切であることをこの話から学びました」と書いている。

これに引き続いて、青森県の生活つづり方教師、津田八洲男の生活つづり方実践を紹介したビデオ「津田っちの赤ペン」を見せた。日記の赤ペン指導・学級通信を中心にしていたのだが、学生は津田の実践を、「子どもに対して同じ目線で考え、そういう考えを認めた上で助言するということに、自分だったら「これは正しくない」と子どもに押し付けてしまうと思った。津田先生は教師としての自覚・使命感はもちろん、子どもの「自分探し」に協力し、その中で深い信頼関係を築いている」と見ている。このような実践が、印象深いエピソードで語られていた。

自分をさらけだすという教師の身体性にも、注目していた。ある学生は、「一人の人間として、生徒が失敗談を書いたら自分も失敗談を書く、生徒が悲しかったことを書いたら自分も悲しかったことを書くなどして、生徒に自分を飾ることをせず、さらけ出して、こどもと接していた」と書いている。といっても、「ただ単にやさしいわけではなく、同時に厳しさをも持ち合わせている。教師と生徒という立場を超えた、人対人というものを見たような気がした」と、別の学生は書いている。

日記の赤ペン指導・学級通信が学級の子どもを結びつけ、さらには親と子どもを結びつけ、信頼関係を強めていることに、多くの学生は気づいた。このような結びつきを学生は渇望しているようにも見えた、

津田八洲男の生活つづり方実践は、学生に理想の教師像・教職像の一つを示した。ある学生は「私は、この津田先生の教師生活にとてもあこがれました。子供たちの心を完璧につかんで、一日一日を子どもと楽しみながら生活していく姿を見ていると、自分までわくわくしていきました」と書き、別の学生は「津田先生はまさに私が理想とする教師像にぴったりと当てはまる人物だったと思います」と書いている。

とはいえ、毎日赤ペン指導をし、学級通信を出し続けることの大変さ、津田八洲男が完璧な人間ではなく、過去に手痛い失敗を経験し、いまも「これでよかったか」と迷い、実践している姿を、どれほど捉えたかは、検討の余地がある。しかしこの段階では、光の面に焦点を当てて、理想の教師像を見ていたといえよう。

③　教科指導

教科指導については、独特の教育観・授業観で学級経営にあたり、研究授業をとおして教師の成長と学校づくりに取り組んだ伊藤功一校長の校長最後の１年間をビデオにした「若き教師たちへ」を第６回で見せた。引き続き、第７回では、からだをはっての教材開発とパフォーマンスに挑んだ高校物理教師の１年間のとりくみを、ビデオ「“のらねこ”の挑戦」で見せた。

ビデオ「若き教師たちへ」について、ある学生は「授業の難しさがわかった。ベテラン教師でさえ四苦八苦しながら、授業を進めているのを見て、去年の子どもは理解できたから今年の子どももできると考えて、毎年同じ授業を繰り返すのではなく、教師自身が自分の授業を見直すことによって子供の意識も変わり、熱意が伝わると思った。」と書いている。

ビデオ「“のらねこ”の挑戦」には、多くの学生が感動した。いくつか紹介しよう。

「「授業をいかに楽しく、こどもたちに興味を持たせるか」。いままで授業は教科書にそってやればよいという授業を受けてきた自分にとって、とてつもなく斬新なものだった。この課題に対して真剣に取り組んでいる先生たちがいることに胸を打たれた。小川先生の「やってみよう精神」「教師自らがからだを張って授業に取り組む姿勢を持つこと」に自分は共感を持った。今までの授業のあり方を壊して独自のものをつくりだすことは、楽しそうでやりがいがあるけれど、手を抜き始めたらそこで終わりだと思う。「やってみよう精神」は、この授業で得られた最高の収穫です。」

「この「“のらねこ”の挑戦」というビデオを見て、私が学んだと特に実感できることは、小川先生のあの「情熱」だ。以前の私は、「先生になってもある程度冷めていこう」と考えていた。自分だけが熱くなって生徒は冷めているという状態に

なるのがただ怖かったからだ。自分を守るための作戦だと思っていたけれど、今考えると、自分が考えていた最低教師の像にぴったりあてはまるから怖い。空回りすることがあってもいいと今は思うことができる。冷めた生徒がいま現在の学校にはたくさんいるのが現状だが、そんな子どもを一人でも熱くしてみたい。心から楽しませてあげたいと思う。現実はきっととてつもなく厳しく大変なものだと思うが、そんな気持ちは忘れたくない。」

いずれも、教科指導に挑む教師の姿にそくして「情熱」の重要性をしっかりとらえ、その方向性をつかんでいる。そして、「冷めた教師」から「情熱を賭けた教師」への教師像の大転換である。このような影響力をビデオが持っていることに、驚嘆するほかない。このような「情熱」は彼の「市民教育としての科学教育」構想と「科学教育」観に裏打ちされているのだが、この段階ではそこまでは難しいだろう。そのことの洞察は「教育課程・教育方法」で発展することを期待するほかない。

④　教育評価――指導要録と内申書――

第９回では、多くの教科書では扱っていないが重要な現実である教育評価（指導要録と内申書）の問題を取り上げた。はじめに教育評価（指導要録と内申書）について概要を説明した後、ビデオ「内申書はこうしてつくられる」を見せた。高校入試における内申書重視のなかで、子どものよさを見つけアピールするために大変な努力をしている中学校教師の姿を中心にして、映していた。ある学生は、次のように書いている。

「もうひとつ印象に残ったのは、子供たち一人一人の内申書を書いていく教師の姿だった。生徒からしてみれば、志望校に合格できるか、不合格になるかを決めてしまう内申書にはとてもびくびくしている。先生はそんな生徒の内申書を事務的にぱっぱと書いてしまうと思ったが、教師も、生徒の将来にかかわるものだから、生徒一人一人を見つめてその子のよいところをよいところをと、書いていく姿が印象的だった。また、内申書を見ていく高校側も、ビデオで見たように、一生懸命にその子のよさを一つ一つていねいに拾っていくことに驚いた。教師はみんな生徒の真剣さに応えていくことが大切なのだと学び取った。」

指導要録・内申書をつける仕事を誠実にやっていく中学校教師の誠意に心打たれ、ここから、誠意・誠実さを教師の活動に即して具体化し、教師像をふくらませる学生の姿を見ることができる。

⑤　教職の特徴とストレス

第12回・第13回で「教職の特徴と教師のストレス」を扱った。教職をめぐる厳しさ・大変さをリアルに認識したなかで「それでも」と意欲を燃やした学生に、またもや大変厳しい現実を見せ、揺さぶりをかけたのである。大変な厳しさにショックを受ける。だが、それにもめげない学生もいたのは救いである。学生の書いたものをあげよう。

「「学校に行きたくない教師たち」を見たことによって、それまで持っていた「教師」というイメージが壊された。教師間での「いじめ」があると知ったときは、本当に幻滅し、「いったいこの人たちは、子どもに何を教えているんだろう」「教師になろうと決めた動機は何だろう」と思った。私は、このビデオの中に出てきた教師たちのような痛い目にあいたくないし、痛い目にあわせるような教師にも絶対にならないと決めた。」

「このビデオが１番印象に残った理由は、一番教師の現場の核心にせまったと思ったからです。ショックを受けた反面、授業とかに入る以前の一番知らなければならない問題を見ることができてよかったと思いました。このビデオを見ないで教師になったら、ショックで耐えられなくやめてしまうこともあるだろうと思う。だけど、このようなことを事前に知っていたら、進路を変えることもできるし、心構えだってできるから、見てよかったし、勉強になった。」

大変さにもかかわらず、やりがいのある仕事という側面にも眼を向け、教職を多面的にとらえようとする学生も何人かいた。このことは、これまでの教師の教育活動を丹念に見てきて、そこでの教師の奮闘を実感したことによるものと思われる。この視点から学生の書いたものをあげよう。

「一見、華やかで楽しそうに見える教師たちも、教職という仕事の中で、授業、評価と悩み、たえず学校や子どもたちのことを考えていかないといけないことに加え、多忙であることに驚く反面、立派な教師となるには、それを乗り越えていかな

ければならない壁の厚さに自信喪失になった。しかし、ビデオの教師たちが荒れている生徒たちに立ち向かい、試行錯誤しながらも、何とかうまくやっていこうとする強さに心打たれ、教師には、肉体的にも、精神的にも強くないとやっていけないことを教えられたような気がした。どんな困難な問題にも逃げ出さずに、生徒とのコミュニケーションをうまく図りながら教師生活を送ることの重要性を学ぶことができた。」

「いままで生徒の立場からしか見ていなかったので気づかなかったが、授業をやるのだけが仕事ではなく、事務処理が多いことを知った。多忙や人間関係でストレスを感じ、教師を辞めたいと思ったことが多いにもかかわらず、実際に休職したり辞めたりする人は少ない。外科医と同じくらいのストレスを教師は感じていても、子どもの成長が見えやすく、また自分自身も成長でき、ストレス以上の大きな喜びを得ることができる。人間と接する仕事だからこそ得る満足感。そしてとてもやりがいのある仕事。教職はストレスも多いが満足感も高い仕事だということを学んだ。」

## 4.「教職研究」と教職志望

学生には、「「教職研究」を受講し終えて、進路選択の一つとして教職・教師を志望しますか。いまの考えとその理由を書いてください。」として、教師としての自己の適性判断、教職志望の可否について記述してもらった。

### (1) 教師希望の可否について

文章記述の中から、教職希望の可否を数量的に整理してみると次のようになった。

教師になりたい・教職に就きたい ……43
考えていなかったが、進路選択の一つとして考えてみたい …… 4
悩んでいる …… 6
教師になりたくない・教職に就きたくない …… 1

学生の回答をみると、あれほどゆさぶりをかけたにもかかわらず、「教師になりたい・教職に就きたい」が圧倒的に多い。中には、「ますます教師になりたくなった・教職に就きたいと思うようになった」という者が5名いるし、「教師・教職を考えていなかったが、進路選択の一つとして考えてみたい」という者が2名もいる。その意味からは、結果的に教職への志向性を高めたともいえるだろう。しかしそれは、以下の文章記述でも見るように、単なる憧れで判断しているわけではなく、厳しさを覚悟しつつそのなかの喜び・やりがいに自己をかけたいという思いで選択しているのであり、授業担当者としては、その決断を重く受け止める必要があるだろう。

### (2) 文章記述の中から

①「教師になりたい・教職に就きたい」

＜以前より教職志望が強くなった＞

「ますます、教職・教師への希望が膨らみました。たしかに、この授業で見た教師たちは、いろいろなストレスを抱え、いろいろな問題にぶつかり苦労しているが、それもこれも、教師自身の力で良くもなれば悪くもなるということに、やりがいがとても感じられた。」

「この授業、特にビデオをとおして、ますます教師になりたくなりました。教職の大変さ、つらさ、そして楽しさを学ぶことができました。子どもを教育するというのは、とても大きな責任がある。しかし、やりがいのある仕事だと思います。子どもの成長をともに喜び、そこから自分自身も学び、成長していく。本当にすばらしい仕事だと思います。一生懸命勉強して、がんばって、すばらしい教師になりたいです。」

「将来自分が教育現場に立ったときにやっていけるかどうか不安になった。しかし、がんばる教師の姿を見て、教師になりたいという気持ちは強くなった。これからいつ気持ちの変化があるかわからないが、もっと深く教職という仕事について知りたいし、小さいころからの夢でもあるので、実現させるためにもがんばりたい。」

＜教師になりたい・教職に就きたい＞

「私は教師になりたい。忙しいのは百も承知だ。子どもたちだっていうことを聞いてくれるかわからないし、いじめにあうかもしれない。でも、サラリーマンみたいな、変化のない人生を送りたくない。「忙しいが毎日変化のある充実した仕事」をしてみたい。子どもたちだって、こちらが熱意

を持って接すれば、心を開いてくれるものと信じている。教師という職業に不安もあるが、期待のほうがはるかに大きいので、是が非でも教師になりたいと思っている。」

「希望します。たしかにこの授業で見たビデオ等の多くは、教師の苦悩・大変さがまじまじと出ていた。しかし、その裏には、子どもたちと信頼関係が生まれていき、教師としての喜びを感じている先生方の姿がありました。僕は人の心と心でつきあうことが好きです。ましてや子どもは感性豊かで、純粋なところがあります。ですから、僕はその中で、心と心で向き合い、お互いに向上していけるような教育がしてみたいので、教師になりたいです。今まで出会ってきた、そのようなすばらしい先生方のように。」

「教職を希望します。たしかに、ビデオを見ていて、教師は無理じゃないかと思うこともありました。でも、ビデオに出てきた先生方には、成し遂げたときの達成感がありました。教師としてだけではなく人間として自分が成長していけるのではないかと思って、やっぱり教師になりたいと思いました。」

②「考えていなかったが、進路選択の一つとして考えてみたい」

「私は、入学当時は、教職への道は考えていなかったが、「教職研究」を受講し終えてみて、進路選択の一つとして考えるようになった。これまでの講義では、教師の大変さや学校の問題、子どもの荒れなど、さまざまなことを学んだが、全体を通して、教師とは大変なものであるが、やりがいのある素晴らしい職業だなと考えるようになった。」

「正直言って、僕は教師になりたいと思って教育学部に入ったわけではありません。その気持ちは「教職研究」を終えたいまでも変わりません。ただ、教師という仕事が人と深くかかわる仕事のため、つらい部分が多いと感じましたが、反面よい部分も大きいと感じました。将来は、人と深くかかわる仕事につきたいと思うようになりました。」

「教育学部には入ったものの教職に就くことにはためらいがあった。現在、学校でのあらゆる問題がクローズアップされ、子どもたちの内面的な部分までしっかり理解し、そして育てなければならないことの大変さを感じていたためだ。しかし「教職研究」をとおして、果たすべき責任は大きいが、それだけやりがいもあり、また自分も成長する場として教職を進路選択の一つとして考えられるようになった。」

「いまの段階で、自分の考えの甘さや力不足が眼に見えて、とても自信をなくしてしまった。しかし、教職・教師というものは、自分も変われる、成長していける良いものだと心の底から本当に思った。私はずっと以前から「子どもを教育していくことは国をも良くしていくことだ」と思ってきました。改めて、子どもを教育することの難しさや、自分のためにもなることがわかって、ゆっくり深く教職の勉強をもっとしたいと思った。」

③　自分の性格や適性を思うと、「悩んでいる」

「教師の悩みや苦労話を聞かされると、自信がなくなってしまいます。私の目指す教師は人間味あふれたものであるのに、私自身がそうでないような気がして、こんな私が教師を目指してよいのだろうか、と思ってしまいます。たしかに、完璧な人なんていないかもしれないけれど、苦しみ悩んでいる子どもたちに手を差し伸べられるほど、私は成長しているのかという疑問にぶつかるのが、いまの気持ちです。」

「いま、私の中では進路選択として、教職を希望するとははっきり言えない。この授業で教職の厳しさ、メリット・デメリットをたくさん学び見てきた。そしていま現在、教員採用枠が極端に少ないのも、はっきり言えない理由のひとつだ。でも今後、私が本気で心から「教師になりたい」と思ったとき、これらの理由はいらないだろう。本気で希望するかどうかはいまわからないが、そのときのために「教職」という職業をこれからも学んでいきたい。」

「実際に深く考えてみると、いまだに答えを出せていない。この授業では教師のつらい現実も見ることができ、単にあこがれ・夢だけでは成立しない仕事だと思った。それは、どんな職業でもあてはまる。しかし、普通の仕事と違い、教師は子どもに教えるという点で非常に責任が重いと思う。私はこれからも授業を受けていく中でその責任を自分がはたせるかどうかを見極めたいと思っている。」

「私が教育学部に入ることを兄と姉が強く反対していた。兄と姉も一時は教師を目指していたが、いまは異なる仕事に就いている。教師同士のいじめや厳しい就業時間なども事前に知っていた。だが、私は中学の担任のような教師になりたいと夢見て、いまの教育学部に入った。しかし、いまは生半可な気持ちで教師になっていいのか、すぐにやめてしまうのではないかと、悩むことが多くなった。私は教師になることを希望している。しかし、いま心が揺れ、決めかねている。」

「どっちつかずの状態です。教師の現状を知り大変だと思う反面、生徒とのかかわりは楽しいものだとも思い、悩んでいます。教師が本当に自分のやりたいことなのか、自分は本当はやりたいことがあってそれを見逃しているのではないか、と考えるようになり、将来のことにいま悩んでいます。」

これらの記述を読むと、彼らは大変さ・厳しさの中に喜び・やりがい・生きがいがあることは認識している。そして教師になること・教職に就くことに誠実に向き合い、自分は教師に向いているのか、適性があるのかの判断に迷っている。「自分さがし」の途中にあるようだ。この「教職研究」の授業もひとつの進路選択の機会になったが、まだ結論をだせていない。これからの教職科目や教育実習で最終結論をだすことになるだろう。彼らの自主判断を尊重するとともに、進路選択の支援が何らかの形でできればよいと私は考えている。

④「教師になりたくない・教職に就きたくない」

「いまは希望していません。この授業をとおして感じたことは、教師という職業がどれだけ子どもたちの人生に大きくかかわるか、そして教職の大変さでした。本当に子どもたちが好きで、相当の強い意志をもっていないと、自分にとっても、また子どもたちにとってもマイナスが多い気がします。今は他にやりたいことがあるし、教職は考えていません。」

教職の大変さ、場合によって子どもの人生を大きく変えることへの影響を的確に認識している。その上で、自分の性格や興味・関心・したいことを考えると、いまは「教師になりたくない・教職に就きたくない」と考えているのである。「教職研究」で学んだことは、結果のあらわれはちがっていても、本人にとっては「自らの進路に教職を選択することへの可否を適切に判断することに資する各種の機会の提供」の一つになっているのである。このことは高く評価されなくてはならないだろう。

## おわりに

これまで見てきたように、「教職研究」の授業では、苦闘の渦中にある教師の活動の様子をビデオで追体験させて、憧れ・夢的な教職像・教職志望にゆさぶりをかけた。学生たちは教職・教師をめぐる現実をリアルに認識するとともに、それを手がかりにして進路選択を考えていることが、最後の授業での自己ふりかえりから明確になった。

授業形態は、講義とビデオ視聴という相変わらず旧式の授業だが、それでも学生の中に葛藤が起こり進路選択・自己適性を模索していることが見えてきた。

しかし、東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センター主催の第１回教師教育実践ワークショップに参加して、学生自らが調査し体験するような参加型の活動も取り入れる必要があることに気づいた。また、高校教員が非常勤講師で「教職の意義等に関する科目」を担当している実践をみると、かなりきめ細かい資料を作成していることがわかり、もっと工夫が必要だと思った。[6] これらは私の課題にしたい。

## 注

(1) 高野和子「一般大学における教職課程教育――「教職の意義等に関する科目」の位置づけとも関わって――」、『教師教育研究』第14号、全国私立大学教職課程研究連絡協議会、2001年。近藤健一郎「新免許法における新設科目「教職入門」の試み」、『日本教師教育学会年報』第10号、2001年。

(2) 第１回教師教育実践交流ワークショップの趣旨説明には、「このワークショップは、昨年度設置された全国共同利用施設・東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センターの事業の一環として企画されたものです。大学の設立主体（国・公・私）や規模・組織などの違いを超えて、各大学でとりくまれている教師教育の理念や実践を交流し、大学における教

員養成の質的向上に寄与することを目的にしています。……今回は手始めに、新免許法の施行に伴って新しく加わった「教職の意義等に関する科目」をとりあげます。各大学の具体的実践のアイディアを交流し、今後に向けての問題点や課題を共有できればと願っています。」とある。参加してみて、シラバス内容と実施形態の多様さに驚かされた。

(3) 日本教師教育学会「98改正教免法・同施行規則及び関連資料」、1998年6月27日、31ページ。

(4) 高野和子、前掲、69ページ。

(5) 山崎準二「おわりに」、伊藤敬編『21世紀の学校と教師』学文社、211ページ。

(6) 学校教師・教育者に聞き取りを行ってレポートを作成するという高野和子のレポート要項、関根荒正「「教職概論」（「教職の意義等に関する科目」）の実践に関する資料」。いずれも第1回教師教育実践交流ワークショップ配布資料、2001年10月8日。